

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.156

2013年6月20日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

図書館員になるささやかなきっかけ

館長・大学教授(図書館情報学担当) 瀬島 健二郎

東京で私が働き始めて40年、大学に入るために岡山の田舎から上京してからは44年が過ぎた。今年も大学では多くの新入生を迎えた。彼ら、彼女らの自己紹介文を読むと、様々な思いが駆け巡る。特に、かつての私と同じく地方から上京して、ひとり暮らしを始めた時の心細さが綴られていると、身につまされる。時代は変わっても、親離れしてひとり生活を始めるとの困難さは変わらない。私は学生時代に、親元から通っている友人を心底うらやましく思ったものだ。

しかし、時がたつにつれて次第にひとり暮らしや大学生活にも慣れ、学年が進むと、卒業後の進路をどうするかを考える時期が来る。私の場合、大学2年の後半に就職を考え始めた。民間企業に入ろうと思わなかったのも、図書館で働こうかと考えた。当時、少しは情報収集をしたのだと思うが、大学3年の年に、神奈川の大学から文京区にある大学の夜間の司書講習に1年間通って、資格を取ることができた。4年生になり、東京都の司書採用試験を受け、職員となることができた。たまたま受講したその大学の司書講習は、かなり評価が高かったと、後で知った。

なぜ、図書館で働こうと思ったのだろうか。本や

雑誌、新聞を子供の時からよく読んでいた。読書好きだったということもある。しかし、私には別の理由があった。それは小学校、中学、高校とほぼ一貫して図書委員をしていたことだ。その最初のきっかけは、小学4年の時にたまたま図書委員に選ばれて、1年間図書室の当番を経験したことにある。だが、当番の仕事が面白かったのではなく、その学年が終わる時の集まりで担当の先生が「ご苦労さま」と言って消しゴム付き鉛筆を全員に1本ずつくださったことがその理由だ。貧乏だった私には、それが大変うれしかったことを、今でもはっきりと覚えている。図書委員の仕事は男子には人気がなく、希望すればなれることに気がつき、6年でも図書委員になったが、先生が代わっていて鉛筆はもらえなかった。しかし、その後も図書委員を続けることにはなった。

そのような経緯から図書館で働くことになり、それが今につながっている。その大本は何だろうかと考えてみると、私の場合は一本の鉛筆に行き着く。どんなにささやかな経験でも、その後の人生に大きな影響を及ぼすことがあるのだ。

学生の皆さん、いろんな経験に挑戦してください。きっと、将来への可能性が広がると思います。

白水隆著『原色圖鑑 日本の蝶』

文化学園大学教授(グラフィック・プロダクトデザイン担当) 松本 章

私が幼少期を過ごしたのは福岡・北九州市です。木々に囲まれた神社や日当りのいい原っぱなど自然に恵まれた環境で育ったため、小学生の頃に熱中したのは蝶の採集です。毎日捕虫網を手に蝶を追いかける当時の私の愛読書は昆虫図鑑でした。

最初に手に入れた図鑑は親に買ってもらったもので、それを毎日飽きもせずにかけては、標本写真のひとつひとつを食い入るように眺め、解説文を暗記するほど繰り返し読み続けました。憧れの蝶の生息地が九州から遠く離れた場所だと知ると、その地を華麗に舞うまだ見ぬ美しい姿を想像しては、うっとりとした息をつく毎日でした。

6年生の時に日本^{うんし}鱗翅学会という鱗翅目(昆虫の分類上の一目で蝶と蛾のグループ)研究の学会に入会します。最年少でした。自宅に送られてくる専門的な学会誌をほとんど理解できないながらも興味をもって読み続けられたのは、蝶類学が一部の学者による閉鎖的なものではなく、全国の愛好家やアマチュア研究者たちの熱心な活動に支えられた開かれた世界だったからです。

その後、私の蝶採集への思いは熱病のようになっていきました。夏休みは宿題もそっちのけで蝶を追いかける日々です。種類ごとの行動習性や食性、雌雄の見分け方や季節変異といった図鑑に書かれていることはほぼ頭の中に入っています。

そんな時期、どうしても手に入れた一冊の本がありました。それが『原色圖鑑 日本の蝶』です。著者は日本の蝶類研究の第一人者であった九州大学の白水隆^{しろうずたかし}教授です。価格はなんと5000円。昭和43年当時の小学生に手が出せる金額ではあ

りません。毎月のお小遣いが300円程度の私はこの本がどうしても欲しくて親に交渉しました。そして毎朝早起きして父親の靴磨きをする見返りに10円がもらえるという約束を取り付けました。

1年かけて念願かない購入した図鑑、毎日学校から帰ると本棚から大切に取出しては、解説文に書かれた用語を辞書で調べたり、図版と自分の標本とを見比べる至福の時間を過ごしました。

そんなある日、私が採集した1匹の蝶の標本を眺めている時のことです。翅の模様^{はね}が図鑑のものとは少し違っています。これは新発見に違いないと、無謀にも私は白水先生宛てに標本を送って同定を依頼したのでした。するとなんと白水先生はそんな私に細かい文字がびっしりと書かれた葉書で返事をくださったのです。そこには私の疑問に対する適切な助言と、虫好きの少年への温かい応援メッセージが丁寧な言葉使いで書かれていました。同定結果としては単なる個体変異の一種というあつけない結末でしたが、この一枚の葉書は私にとってかけがえのない宝物になりました。

白水先生は9年前に86歳でお亡くなりになったと聞いています。あの当時九州大学で教鞭を執られていた多忙を極める理学博士が、見ず知らずの13歳の昆虫少年に向けてくださった真摯で誠実な対応こそは、後進の育成と自然科学の発展を願う真の科学者の姿とっていいでしょう。

現在、私自身も教員として大学に勤務しています。あの頃の白水先生と同じ立場としてこの少年時代の出来事は、今も自らの教育姿勢を振り返り背筋を正す大切な思い出になっているのです。

『Revue de la mode : gazette de la famille』

文化服装学院非常勤講師(西洋服装史特論担当) 横田 尚美

本誌の題は、直訳すれば「ファッション雑誌、家族の新聞」という意味になる。1872年にCamille Adolphe Goubaud(1808年生まれ)によって創刊された週刊誌で、息子のAbellに受け継がれた。彼らは何誌ものファッション雑誌を発行し、6つの印刷所と2つの製本所、服飾専門学校を運営したⁱⁱ。

本誌のうち、本図書館が所蔵するのは1876年12月3日号から1879年10月26日号までと、1890年、1894年、1895年の各1年分である。

1870年代の合本の挨拶文によれば、「鉛筆と筆とペンによって、素晴らしいフランスの製品とファッションを守り、良い趣味と品、健全なエレガンスを広めるために創刊した」という。

1870年代は日曜発売。シンプルなエディションで25センチム、型紙がファッションプレート1枚がつくと各々50センチム、その両方がつくと75センチムと3段階があった。所蔵分には、プレートが含まれる合本と含まれない合本の2種類があるが、型紙はついていない。

一見して、雑誌全体の構成やイラストの使われ方、掲載されている内容など、同時代の代表的女性誌『*La Mode Illustrée: journal de la famille 1860-1937*』ⁱⁱⁱ(以下、MI誌)との類似性に気づかされる。Goubaudはそれより早い1843年に『*Le Moniteur de la Mode: journal du grand monde*』^{iv}を出版しているが、少なくとも本図書館が所蔵する1854年までは判型が小さく、内容にも類似点がない。

残念ながら本誌の1860-70年代の所蔵はないので比較できないが、MI誌は1860年創刊。MI誌とは、判型も3段階の価格も同一である。副題は、表現が違ってもその意味は変わらない。1年に52号発行され、

ファッションプレートが1枚つづのもの、型紙がついている場合に「型紙つき」と明記されているのも、装飾的なタイトルの下に価格などが提示されているのも同じである。ページ数も、両誌とも毎号プレートをのぞき8ページだった。

表紙に女性のイラストなどがあり、2ページから5ページには手芸の図案と服や服飾品のイラストが並び、後半に小説や役立つ情報などが掲載され、最後にクイズがあるという構成も変わらない。

服は女性用が主で、テーラードカラーや既製服などに加え、ジャポニズムやタータンチェックの流行、様々なTPOに対応する服、演劇にちなんだ商品名、黒い服が頻出することなどは、この時代の傾向である。さらに両誌とも、子供服や下着がしばしば紹介され、時折インテリアの記事が見られる。

またMI誌に描いている挿絵画家の名が、本誌でも確認できる。服の前後を並列して示す手法も共通に見られる。

これらのことから、本誌が創刊する時点で評判となっていたMI誌が意識された可能性が、まったくないとはいえない。しかし、同じ「家族の新聞」だが本誌にはクリスマス色がほとんどない。MI誌には、ほかにも子供を喜ばせるような内容の記事が載っている。このように違いも見られる。

本誌のシンプルなエディションには、表紙からすべての図版に通し番号が振られ、順番に説明がつけられている。価格が表記されることはほとんどない。カラープレートや型紙の説明もすべて掲載されている。

型紙については、休日以外は毎日開いているアトリエがあり、訪れた読者は自分にぴったりのパターンを持ち帰ることができると、1879年に2回記されている

る。遠方の読者には、寸法を知らせて郵便為替で代金を払えば、型紙を郵送するとも付け加えられている。型紙を依頼する場合の採寸の注意事項もイラスト付きで示される。服の上半身をボディフィットさせねばならなかったからだ。

残念ながら、1880年代の所蔵がないので変遷がわからないが、1890年代には土曜発売となっている。タイトル下にディレクターのAbelの名が明記されている。ページが増えて10ページになり、判型もMI誌よりも大きくなった。その上、6種類のエディションが発行されるようになっており、その違いがしばしば半ページを割いて説明される。

1890年について見てみると、シンプルなエディションは、1年に52号のイラスト入り雑誌(所蔵は、この本体のみである)と実物大の型紙12枚、トレースして使う型紙12枚からなる。エディションNo.1は、型紙12枚の代わりにカラープレート52枚が含まれる。エディションNo.2は、No.1に型紙40枚が加わる。No.3は、No.2に加え、豪華な図版24点がつく。No.4は、豪華な図版が52点に増え、それに別売りだった同社のファッションカタログ(しばしば誌上に広告が掲載されている)がつく。No.5はNo.4に加え、帽子のすてきなカラー図版48点がつく。

これをパリでの定期購読1年分で見ると、シンプルなエディションなら14フランだが、No.5は66フランだ。エディションの内容は、その後多少変わっている。しかも同誌は、ヨーロッパの隅々どころか、南北アメリカにまでエージェンツ網を広げていた。

シンプルなエディション以外につく付録の内容は、以前と同様に本誌の中で説明され、型紙の服を説明するための裁断図も掲載されるようになった。この時代ならではのエレファントスリーブのスポーツウエア(図版参照)や、ロココリバイバルを示すルイ16世風ジャケット、当時の人気女優レジャーヌの名を冠したフレアスカートなどが見られる。囲み製図や、バイアスを使った裁断図もある。円を利用する考え方が多いのが特徴的だ。

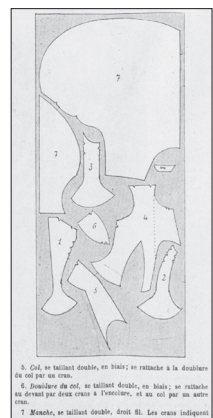
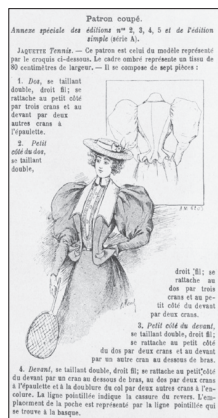
この時代になるとconfection(既製服)という表現

がほとんど見られなくなる。毎号裁断図が載るようになり、エディションによっては、少なくない型紙がつくことと、関連があるだろうか。

演劇に関する記事は1870年代に比べると全体的には減る分、時々「ファッション時評」で取り上げられるようになる。「クレオパトラ」でのサラ・ベルナルルの古代風衣装や、「サロメ」での蛇を巻きつけた姿など、話題の演劇と衣装が流行と関連して扱われている。

Goubaudが出版していた雑誌には、しばしば図版の転用が見られたことが指摘されている^v。本図書館で確認できるのは1895年分だけだが、『*Le Moniteur de la Mode*』と本誌とは、小さかった前者の判型も、本誌と同じになって、毎号表紙と4ページ目の左下のイラストが入れ替わっている以外はまったく同じ内容である。本誌の広告欄には、前述の学校が型紙のアトリエのことかと思われるが、SALONS DE PATRONS-MODÈLES du Moniteur de la Mode(「モニテール・ドゥ・ラ・モード」の型紙と見本の店)の「裁断と仕立講座」の案内が出ている。

本誌を含む同社の雑誌は、1913年にアシェット社の『*La Mode Pratique*』(1891年創刊)に吸収合併され、その歴史を閉じる^{vii}。他誌との関係も含め、19世紀終わりの流行の広がりや出版事情について、気づかせてくれることの少なくない雑誌である。



1895年7月20日号 型紙(特別付録) テニスジャケット

i Revueはjournalよりも高級ととらえられていたと、松田祐子が指摘している。『主婦になったパリのブルジョワ女性たち-100年前の新聞・雑誌から読み解く-』大阪大学出版会(2009年)p.7(367.235/M)
ii GAUDRIAULT, Raymond, *La Gravure de Mode Feminine en France*, Les editions de l'amateur, 1983, p.150(383.135/G)
iii 『文化女子大学図書館所蔵服飾関連雑誌 解題・目録』文化女子大学図書館(2005年)p.153(383.103/B)
iv 註iii p.149参照 v 註ii p.100 vi 註ii p.162 vii 註ii p.150

20世紀日本のファッションイラストレーションの書

文化学園大学教授(ファッションデザイン画担当) 長沢 幸子

日本においては、素晴らしいファッションイラストレーション作品がたくさん制作され蓄積されている。その中から筆者が直接的に大きな影響を受けた作家の作品が掲載された図書を紹介する。

まず、中原淳一先生の著された『それいゆ』。

筆者が東京でこの世に生を受けてから10歳頃までの洋服(編み物・発表会用ドレス含む)・和服(七五三など)・服飾グッズ(靴除く)の6、7割は母の手作り品であった。その際の被服製作の指南書はもちろん、『装苑』をはじめとする、「文化式原型」をいただき燦然と輝く文化服装学院出版局(現・文化出版局)発行の書籍・雑誌群であった。またデザインの参考書は『装苑』などとともに、中原淳一先生のスタイル画を中心に構成された『それいゆ』(バックナンバー)が多かった。「文化式洋裁+中原淳一先生のセンス」が筆者に幼少期よりしっかりと刷り込まれた。中原淳一先生の洗練され、かつ抒情性あふれるセンス、およびペン・水彩を中心とした表現技法は、その後の日本のファッションイラストレーションの大きな礎となっている。

次に、矢島功先生の著された『ファッションドローイング』。

筆者が文化女子大学(現・文化学園大学)に入学し、ファッションデザインの専門誌にバックナンバーをも含めて触れるようになった頃、圧倒的な存在感で表紙および巻頭に掲載されていたのが矢島功先生の描かれたファッションイラストレーション群であった。その洗練の極みかつ躍動感あふれるクールな美しさ、深い芸術性は筆者の目に強烈に焼きつけられた。その後まもなく、矢島

功先生はミラノへ仕事の拠点を移され、イタリア版『VOGUE』、フランス・プレタポルテ協会発行専門誌など、海外ファッション誌・専門誌のイラストレーションを手がけられた。またミラノ・コレクションでは、発表されるファッションデザイナーの最新作を着て通り過ぎるスーパーモデルをランウェイの至近で描かれた。一方、国内でも、矢島功先生が小田急百貨店(新宿駅西口)、マイシティ(新宿駅東口・現・ルミネエスト)などのポスター・チラシ類のファッションイラストレーションを描いていらっかった時期があった。筆者は文化学園文化女子大学の勤務を終えた帰途中に、各々のビル受付に立ち寄り新作のチラシを入手して(文化学園は立地も最高に素晴らしい)、嬉しい気分で帰宅した(そのチラシ類は現在も大切に保管してある)。のちの1996年から2006年、矢島功先生は文化女子大学教授に就任され、本学園においても多くの功績を残された。

文化学園も矢島功先生も最高に素晴らしい。

21世紀の現在、ファッションイラストレーションの世界は、さらなる進展を続けている。若い皆さんには、過去のアーカイブに感謝し謙虚に学びながら、現在から未来の時代に合わせたますますのご成長、ご活躍を期待したい。

*中原淳一編 『それいゆ―復刻版―』国書刊行会 2000 <雑誌書庫2>

*矢島功著 『ファッションドローイング2』グラフィック社 1990 <593.38/Y/2>

*なお、中原淳一先生、矢島功先生はじめ日本のファッションイラストレーションの歴史を概観しまとめた拙著、平成22年度科学研究費補助金研究成果『ファッションイラストレーション クロニクル』角川学芸出版 2011 <593.087/N>も参考にしていただければ幸甚である。



図書館からのお知らせ

新館長就任のおしらせ

4月1日付で館長の交代がありました。8年間館長を務められた穴戸寛前館長に代わり、瀬島健二郎教授が就任いたしました。

サービス拡大

4月より下記のサービスを拡大しました。

【貸出冊数】

今までの貸出冊数より2冊多く貸出できるようになりました。

一般学生	7冊
大学4年生	12冊
大学院生・BFGU生・教職員	17冊

【WebOPAC公開テーマ】

公開テーマとはWebOPACの機能のひとつで、テーマごとに推薦する資料の集合を表示(検索)できる機能です。公開テーマはWebOPACの画面上部にあり、現在は下記4テーマを公開しています。

- ・「レポート・卒業論文の書き方の参考になる本」
- ・「学習方法」
- ・「キャンパスライフ」
- ・「利用の多い貴重書デジタルアーカイブ資料」

【新着資料メール通知】

利用者サービス(MyCARIN)のなかにあるサービスです。新着資料が入ったときに利用者があらかじめ登録した内容に合った資料をメールで通知します。学校から配布されたメールアドレスがある利用者を対象としています。

※利用方法は、図書館ホームページ→「資料を探す」→「図書館の使い方」→「利用者サービス(MyCARIN)の使い方」を参照してください。

【予約本到着メール通知】

予約した資料が返却され貸出できる状態になっ

たとき、今までは図書館内の掲示板でお知らせしていましたが、これからは掲示板に加えメールでもお知らせします。

学校から配布されたメールアドレスがない利用者には図書館内の掲示板または電話でお知らせします。

グループ学習室の利用について(新都心)

グループ学習室は、ゼミやグループで話し合いをしながら共同学習するためのスペースです。本学の学生、教職員が3名～12名程度まで利用できます。

事前にレファレンスカウンターで申込書にご記入ください。利用希望日の2週間前から予約を受け付けます。

1回の利用は90分以内ですが、次の予約がない場合は時間を延長できます。

グループ学習室には以下の備品があります。利用する場合は申し込み時(または当日)に申し出てください。

- 1) プロジェクター
- 2) 自立型プロジェクタースクリーン
- 3) ノート型パソコン1台
- 4) LANケーブル
- 5) ホワイトボード
- 6) 2人用可動式テーブル 6台
- 7) 可動式チェア 12脚

皆さまのご利用をお待ちしております。

不明な点はお問い合わせいただくか、
ホームページをご覧ください。

TEL : 03-3299-2395 (新都心キャンパス図書館)
TEL : 042-327-8859 (小平キャンパス図書館)

図書館のホームページ
<http://lib.bunka.ac.jp>